

世界遺産を素材とした地理教育・ESD 実践の試み

—科目「世界遺産で学ぶ地理」の開発と実践—

地理歴史科 今野 良祐

世界遺産は、地球や人類の歴史のなかで生まれ、受け継がれてきた「人類共通の遺産」を保護することを目的としている。世界遺産登録に沸く自治体と地域住民の姿が報じられている一方で、遺産に押し寄せる観光客と延々と続く大渋滞など、遺産の持続可能性を脅かすような状況すら報告されている。保護すべき世界遺産と観光収入に依存する地域との共存は、社会や地域の持続可能性を主題とする地理教育におけるESDの大切な学習テーマである。本科目は世界遺産検定3級の公式テキストで取り上げられている100件の世界遺産を地理で学習する項目に照らし合わせて構想した世界遺産を素材とした地理教育・ESD実践の試みである。

キーワード 地理教育 世界遺産 ESD 地歴融合 持続可能な社会

1. はじめに

2018年3月末に次期高等学校学習指導要領が告示され、地理歴史科必修科目として「地理総合」「歴史総合」が設置されることになった。地理教育関係者が30年来にわたって地理必修化に向けて、多方面に活動してきた成果がようやく結実する。

今回の改訂に大きく寄与したのが、2011年8月に出された「新しい高校地理・歴史教育の創造ーグローバル化に対応した時空間認識の育成ー」である。本提言は、2006年のいわゆる世界史未履修問題に端を発して、地理歴史科において時間認識と空間認識のバランスのとれた教育を目指して検討されたもので、科目の内容・教授法だけでなく大学入試・教員養成の改革案なども盛り込まれた。地理歴史科の科目配置については、必修科目として世界史Aと日本史Aを統合した「歴史基礎」と地理Aを改変した「地理基礎」の新設(当時)が提言された。また、単位数の関係で2つの基礎科目の新設が難しい場合は地理歴史科の総合科目としての「地歴基礎」の新設にも触れられていた。

地理を専門としながら世界史をメインで授業を受け持っていた筆者は、日々の実践を重ねる中で、必然的に地歴融合についての思索を深めることとなった。先述の提言における「地歴基礎」新設案は今次改訂では実現しなかったものの、筆者を地歴融合研究にいざなってくれた。さらに、2011年にユネスコスクールに加盟したことで、学校全体としてのESDの推進とともに、地理歴史科教育におけるESDのあり方を模索していた。そこで、教材として着目したのが世界遺産であった。ユネスコお

よびESDの主要な分野として世界遺産教育が掲げられていること、そして世界遺産は地理・歴史など多面的・多角的な理解が求められることから地歴融合の教材として適していることなどから、新科目開発の構想に至った。

2. 世界遺産教育・ESDと地理教育

2005年よりわが国の提唱によってスタートしたESD(持続可能な開発のための教育)の視点が2009年告示の学習指導要領より明文化されるようになった。ESDはこれまでの社会構築のあり方を反省し、新しい時代に対応した社会を構築するための学際的な知識、価値観の変革・創造およびそれらの実行に必須の能力・態度の形成を目指した教育の考え方であり、その充実が国際的潮流である。従前に引き続き、次期学習指導要領では「持続可能な社会づくり」や「よりよい社会の実現」と文言を変えながらも、すべての科目でESDの視点が盛り込まれており、社会的要請は強まっている。

持続可能な社会やよりよい社会のあり方を考えるうえでまず必要なのが、これまでの社会の持続不可能な状態の経緯、原因、影響などの構造的な理解を深めることである。その際に、社会の諸事象を学習対象とする地理歴史科の場合、地理においては歴史的背景をふまえたり、歴史においては地理的条件と関連付けたりと学際的な視野からの理解や考察が必要である。そのうえで伝統や文化的な背景や地域性を考慮しながら、地域に応じた適切な改善策を議論していく。「持続可能な社会づくり」を考える際には、より一層の地歴連携の充実が必要となると考えられる。地理と歴史がそれぞれ必修科目とな

ったことを契機に、双方がより一層歩み寄り、主題学習や単元レベルにとどまらない地歴連携・融合の授業開発について活性化させ、持続可能な社会づくりに資する地理歴史科教育を創造していく必要がある。その切り口として本研究では世界遺産に活路を見出した次第である。

世界遺産は1972年のユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約（世界遺産条約）」によって、世界各地の顕著な普遍的価値を持つ文化遺産及び自然遺産を、人類共通の宝物として世界遺産登録することで保護し、次世代に継承していくことを目的としている。つまり世界遺産物件そのものと遺産地域を持続可能なものにしていくことを目指しているのである。その世界遺産は2017年7月の第41回世界遺産委員会を経て総数1,073件となった。現在では旅行会社の世界遺産ツアーや雑誌や書籍で特集が組まれるなど世代を問わず人気を博している。しかし、世界遺産の本質的な意味合いを理解している人は決して多くはないのが実情である。淡野（2006）は、世界遺産条約に基づく活動には、より一層の啓発教育が不可欠であり、学校における体系化された教育が必要であることを指摘している。つまり、学校教育における世界遺産教育（WHE: World Heritage Education）の充実が不可欠であるという。

世界遺産教育について語る時、田淵（2011）による以下(a)~(c)の3つの分類が紹介されることが多い。

(a) 世界遺産についての教育（Education about the World Heritage）は、世界遺産の理念や各世界遺産の遺産価値を学ぶなど、一般的に多く実施されているであろう授業や単元の中で主題的に世界遺産を取り上げた教育形態のことを指す。世界遺産検定の対策授業などは、世界遺産についての知識・理解の習得に留まり、「世界遺産＝世界が認めたお墨付きの観光スポット」のような認識を養い、ややもすると世界遺産制度や世界遺産そのものを善のものとしてしかとらえられず、ひいては世界遺産をめぐる諸問題の遠因に寄与することになりかねない。この点は、世界遺産教育において十分に注意を払わなくてはならないだろう。

(b) 世界遺産のための教育（Education for the World Heritage）は、本来の世界遺産制度の目的である保存や保全のために、世界遺産に対して私たちがどのようにふるまうべきかを考えるものである。この段階まで学習することで、(a)で指摘した課題を乗り越えることができよう。

(c) 世界遺産を通しての教育（Education through the World Heritage）は、先述の(a)と(b)の学習をふまえたうえで、さらに世界遺産を切り口として、国際理解教育、平

和教育、人権教育、環境教育などの教育分野に思考の開口を広げていくものである。世界遺産は、人類の歴史、宗教や生活文化、地球の歴史、生態系など人文・自然などの多岐にわたる観点からの価値を持つものである。したがって、その学習領域は地理歴史科のみならず、理科や芸術など多岐にわたる。そして、教科・科目を横断する先述の教育分野においても、世界遺産を切り口としての学習は十分にその機能を果たすことができる。また、「負の遺産」や「危機遺産」など、よりよい未来の創造のために目を背けてはならない人類の負の歴史や危機に瀕しており存在が危ぶまれている遺産などに対して、人々に啓発を呼びかける側面も持っている。

世界遺産教育は本来的に世界遺産と登録地域の持続可能性を議論したり、持続可能な社会を志向している点でESDは密接なかわりを持つ教育であるといえよう。

学校教育における世界遺産教育について、現行のカリキュラムの中では社会科、地理歴史科、あるいは総合的な学習の時間などでのトピックの一つとして登場してくるケースが多く、世界遺産制度の理念や遺産価値などを扱った体系的な世界遺産教育が行われているとは言い難い。特に社会科・地理歴史科のなかでも地理における世界遺産教育の実践事例については、必ずしも多いとは言えない（岩田、2016）。そこで淡野（2006、2007、2010）は、小学校・中学校の社会科地理的分野、高等学校地理での世界遺産の教材化の構想を示している。また、神野・淡野（2010）は、地理において世界遺産が扱えていない理由として、以下の3点を指摘している。①教科書や学習指導要領における世界遺産の扱いが極めて不安定な扱いであること。②世界遺産に対する認知や理解が指導者側にも十分ではない点。③したがって、数多くの世界遺産がある中で、指導者の目線でどれをどう選択すればよいかが半断しがたい点である。これらの課題を克服するために、「地理教育で世界遺産を教える」から「地理教育を世界遺産で教える」というように発想を転換し、世界遺産を切り口とした地理教育の教材化を試みた。しかし、授業展開案の提示のみにとどまっており、年間の授業としてどのように取り組まれたかについては触れられていない。

そこで筆者は、年間を通して世界遺産を切り口とした地理教育を構想し、世界遺産教育と地理教育の両立を試みた。神野・淡野（2010）が指摘した課題を克服するために世界遺産検定3級の公式テキストで取り上げられている100件の世界遺産を地理Aで学習する項目に照らし合わせて配当し、年間の授業計画を構想した。

3. 「世界遺産で学ぶ地理」の授業の実際

2年次一般選択科目(2単位2時間連続)の「世界遺産で学ぶ地理」として開講しており、毎年30名程度が選択している。授業では地理A教科書、世界史A教科書、地図帳、そして世界遺産検定3級公式テキストをサブテキストとして活用した。

基本的には2時間で1話完結型の授業展開とし、中間考査を実施しない代わりに前時の内容に関する小テストを毎時間実施して、段階的に内容の定着を図っている。

【1学期の各授業の概要】

<第1回> 日本の世界遺産、世界遺産の登録基準

冒頭に科目の概要を説明したのち、日本の世界遺産20件を文化遺産と自然遺産に分類するなかで「富士山」の位置づけを考える。この活動を通して、何が世界遺産の条件となっているかを考え、世界遺産の登録基準を学ぶ。

<第2回> 富士山から見る世界の大地形

冒頭に世界遺産登録基準の小テストを実施。成層火山の美しい姿が芸術や信仰の対象となった文化遺産としての「富士山」の姿を学ぶ。富士山周辺の地形図の読図を通して、世界遺産の構成物件を把握する。富士山のような火山や地殻変動が活発な地域の分布を、プレートテクトニクス理論を通して把握する。

<第3回> 自然遺産から見る日本列島の地体構造

「サガルマータ国立公園」の位置するヒマラヤ山脈などの大山脈はどのように形成されたのかを、プレートとテクトニクス理論による地殻変動のしくみと造山帯の分布から学ぶ。あわせて断層湖(構造湖)についても触れる。また、日本の自然遺産の共通点から日本列島付近の地体構造を学ぶ。

<第4回> 外的営力がつくる地形と世界遺産

冒頭に世界遺産条約に関する小テストを実施。世界遺産条約締結のきっかけとなった「ヌビアの遺跡群」の救済の事例から、河川のはたらきを学び、関連する世界遺産を紹介する。外的営力がつくる地形として河川の侵食・運搬・堆積による地形に加えて、氷食地形やカルスト地形、さんご地形なども取り上げる。

<第5回> 植物の分布をコントロールする気候

冒頭に地形と世界遺産の小テストを実施。洋上のアルプスと呼ばれる「屋久島」は、北海道(亜寒帯)から沖

縄(亜熱帯)までの植物の垂直分布がみられる。植物の生育と分布には気温と降水が関わっており、熱帯から寒帯までの代表的な植生を紹介する。また、気候区分の表し方を理解し、気圧の高低や季節風など気候の基本的なしくみを理解する。

<第6回> 生物多様性を支える気候

冒頭に日本の世界遺産について的小テストを実施。映像をまじえて「白神山地」や「知床」の生物多様性のしくみを理解する。続けて、生物多様性を支える流水がなぜ知床にやってくるのかを、大陸の西岸気候と東岸気候の違いから考える。あわせて「白川郷」に特徴的な合掌造りが必要な理由も考える。

<第7回> 熱帯と乾燥帯の世界遺産

冒頭に世界遺産申請手順について的小テストを実施。月末から始まる世界遺産委員会とそこで登録が審議される「明治日本の産業革命遺産」について注目を促す。世界の多様な気候の中でも南米とアフリカの熱帯・乾燥帯地域のみを取り上げて、関連する世界遺産を把握する。なぜ高温多雨地域や乾燥地域などの地域差が生じるのかを大気大循環のしくみから理解する。

<第8回> 広がる宗教・交わる宗教と世界遺産

すでに世界史Aでキリスト教の宗教改革まで学習していることをふまえて、主な世界宗教の誕生から伝播の過程と関連する世界遺産を紹介する。各宗教を代表する建造物だけでなく、異文化の融合した宗教建築を確認する。

<第9回> 日本の神社仏閣と世界遺産

日本の神社仏閣に関する世界遺産が、いつの時代の代表的物件として語られるかを考えたうえで、すでに中学校までに学習している神仏習合、仏教伝来、キリスト教伝来、神仏分離などの簡単な日本宗教史をおさらいし、そこに世界遺産物件を位置づける。

<第10回> 1学期のおさらい&過去問チャレンジ

1学期に取り上げた世界遺産に関して補足説明を行う。また、世界遺産検定3級の過去問にチャレンジし、次週の期末考査に備える。

<1学期期末考査>

出題範囲は、地形、気候・植生、宗教などの地理項目と関連する世界遺産とした。

1 学期に取り上げた世界遺産 (地形・気候分野)

	授業タイトル	地理項目	世界遺産	登録年	(i)	(ii)	(iii)	(iv)	(v)	(vi)	(vii)	(viii)	(ix)	(x)	
4月15日	ガイダンス、世界遺産分類・基準		日本の世界遺産												
4月22日	小テスト①		世界遺産登録基準												
	富士山から見る世界の大地形	火山	富士山ー信仰の対象と芸術の源泉	2013											
			トンガリロ国立公園	1990											
			シンクヴェトリル国立公園	2004											
			ハワイ火山国立公園	1987											
			カムチャツカ火山群	1996											
5月6日	提出課題①		日本の世界遺産マップ												
	富士山から見る世界の大地形	新期造山帯	サガルマータ国立公園	1979											
			カナディアン・ロッキー山脈国立公園群	1984											
			ユングフラウーアレッチュのスイス・アルプス	2001											
			ピレネー山脈のベルデュ山	1997											
		断層湖	バイカル湖	1996											
			マラウイ湖国立公園	1984											
5月20日	小テスト②		日本の世界遺産												
	自然遺産から見る日本列島の地体構造	日本の地体構造	小笠原諸島	2011											
			知床	2005											
			白神山地	1993											
			屋久島	1993											
5月27日	小テスト③		世界遺産のはじまり												
	外的営力がつくる地形と世界遺産	堆積平野	スビアの遺跡群	1979											
		三角州	メンフィスのピラミッド地帯	1979											
			原爆ドーム	1996											
6月3日	外的営力がつくる地形と世界遺産	侵食、V字谷	イグアスの滝	1984											
			ヴィクトリアの滝	1989											
			グランドキャニオン国立公園	1979											
		氷食、U字谷	ユングフラウーアレッチュのスイス・アルプス	2001											
			ロス・グラシアレス氷河	1981											
			フィヨルド	ノルウェー西部フィヨルド	2005										
カルスト地形	中国南方カルスト	2007													
さんご地形	ハ・ロン湾	1994													
			グレートバリアリーフ	1981											
6月10日	小テスト④		地形と世界遺産												
	植物の分布をコントロールする気候	植生垂直分布、気候区分	屋久島	1993											
			グランドキャニオン国立公園	1979											
6月17日	小テスト⑤		世界遺産の登録申請基準												
	生物多様性を支える気候	落葉広葉樹	白神山地	1993											
		西岸気候と東岸気候、季節風	知床	2005											
		日本の気候	白川郷・五箇山	1995											
6月21日	提出課題②		気候のまとめ												
	熱帯と乾燥帯の世界遺産	大気大循環	タツリ・ナジュール	1982											
		熱帯雨林	中央アマゾン自然保護区	2000											
		サバナ	ンゴロンゴロ自然保護区	1979											
乾燥帯		セレンゲティ国立公園	1981												
			ナスカとフマーナ平原の地上絵	1994											
6月24日	小テスト⑥		気候と世界遺産												
	1学期のおさらい	地形・気候分野	1学期に取り上げた世界遺産												

【2学期の各授業の概要】

<第11回> 勝手にニッポン地域遺産いいんかい？

夏休みの宿題として埼玉県内の景勝地について、世界遺産登録基準をあてはめて「地域遺産」を見つめなおす。本時は持ち寄った地域遺産についての発表に取り組む。

<第12回> 地域遺産マップづくり（文化祭展示）

前時で各生徒が発表した地域遺産について、解説ボードの作成とともに、埼玉県全域を示した20万分の1地勢図にマッピングし、文化祭にて展示する。

<第13回> 明治日本の産業革命遺産から見る産業の発展

手工業から機械制工業へ、軽工業から産業革命を経て重工業・重化学工業へという産業の発達について概観したのちに、「明治日本の産業革命遺産」を題材に、日本における産業革命の経過と関連遺産を学ぶ。また、同時期に重工業分野ではないが官営模範工場として生糸を生産していた「富岡製糸場」や農業に向かない地域から屋根裏での養蚕が盛んであった「白川郷・五箇山」に触れる。

<第14回> ヨーロッパ地誌①：産業の発展

日本の産業遺産をふまえて、イギリスにおける産業革命の展開を地理的に考察する。既に世界史Aで産業革命は綿工業の技術革新が契機になったことを学び終えており、ペニン山脈西側のランカシャー地方が偏西風の影響で湿潤であることが綿糸の生産に適していたことやペニン山脈から採掘される石炭を用いた蒸気機関による機械化が進んだことなどの地理的条件を確認した。また、ダービー製鉄法の開発によって鉄鋼業が活発化し、原料・製品輸送のための鉄道や「アイアンブリッジ」などに援用されていったことにも触れる。産業化の一方で生じた労働問題の改善のために「ニュー・ラナーク」におけるロバート・オーウェンの施策にも注目した。ヨーロッパの他の地域における産業に関する世界遺産にも触れる。

<第15回> ヨーロッパ地誌②：ヨーロッパの統合

自然環境、産業、経済水準などの視点からヨーロッパ地域の地域的多様性の状況について確認したのちに、「ヴィッテンベルクの教会群」などをもとに民族・宗教の地域性に着目する。最後にヨーロッパの地域性を特徴づける歴史的展開とキリスト教諸宗派の分布をふまえて、教会や宮殿などの世界遺産建築をもとにヨーロッパの主要建築様式を確認する。

<第16回> 南北アメリカ・オセアニア地誌

：移民による国づくり

冒頭にヨーロッパ世界遺産の建築様式の発展史に関する小テストを実施。本時ではヨーロッパ人が移住または進出した地域として南北アメリカ、オセアニアを扱う。大航海時代以降にヨーロッパ人の進出を受けたラテンアメリカの古代文明の世界遺産やアボリジニの聖地である「ウルル」などに触れて、先住民や多民族間の共存や混血などの様子を学ぶ。中世に世界経済を動かした「ポトシ」と「石見銀山」や「オペラハウス」などの現代的建築の世界遺産についても触れる。

<第17回> 中央・西・南アジア・アフリカ地誌：

ヨーロッパ支配からの脱却

冒頭に南北アメリカ・オセアニア地誌に関する小テストを実施。本時は19世紀帝国主義時代以降欧米からの支配を受けていた地域を中心に扱う。支配の名残を残すアフリカの2つの負の遺産について学ぶ。とはいえ人類のふるさとである「アワッシュ川」や「大ジンバブエ」など負の側面だけではないことにも触れる。古代から東西交通の要所であった西アジアではいくつかの世界遺産とともに危機遺産を取り上げる。

<第18回> 東南アジア・韓国・中国地誌

：世界の成長センター

冒頭に中央～西・南アジア・アフリカ地誌に関する小テストを実施。本時は戦後に第三世界として独自の発展を遂げ、今や世界の成長センターを評される東南アジア・東アジア地域を扱う。東南アジアでは大陸部と島しょ部に分けて地域的特色を把握し、熱帯雨林気候(Af)とサバナ気候(Aw)、仏教文化圏とイスラム文化圏、帝国主義時代の英仏の支配と大航海時代以降の海洋覇権国家による支配の地域差などをいくつかの世界遺産をもとに学ぶ。「万里の長城」をもとに遊牧民と農耕民の南北間の相克と現代における東西間の人の流れに着目して、経済大国中国の特徴を学ぶ。

<第19回> 2学期のおさらい

2学期に取り上げた世界遺産を、地体構造、気候区分、宗教分布の世界地図にマッピングして復習する。

<2学期期末考査>

出題範囲は、産業、世界各地域の地誌的なトピックと関連する世界遺産とした。

2学期に取り上げた世界遺産（宗教・産業・世界地誌）

授業タイトル	地理項目	世界遺産	登録年	(i)	(ii)	(iii)	(iv)	(v)	(vi)	(vii)	(viii)	(ix)	(x)
9月2日	勝手にニッポン地域遺産委員会	地域遺産											
9月16日	広がる宗教・交わる宗教と世界遺産	キリスト教、イスラーム、仏教の聖地	エルサレム旧市街とその城壁群	1981/1982									
		キリスト教	ローマ歴史地区	1980									
		キリスト教	ヴァティカン市国	1984									
		仏教	ブッダの生誕地ルンビニー	1997									
		仏教	敦煌の莫高窟	1987									
		ビザンツ×イスラームの融合	イスタンブル歴史地区	1985									
		ヒンドゥー建築×仏教建築	アンコールの遺跡群	1992									
		イスラーム圏×仏教建築	ポロブドゥールの仏教寺院群	1991									
9月29日	日本の神社仏閣と世界遺産	ヒンドゥー圏×イスラーム建築	タージ・マハル	1983									
		キリスト圏×イスラーム建築	グラナダのアルハンブラ宮殿など(省略)	1984									
		仏教伝来	法隆寺地域の仏教建造物	1993									
		奈良仏教と鎮護国家	古都奈良の文化財	1998									
		平安仏教と比叡山	古都京都の文化財	1994									
		修験道と高野山	紀伊山地の霊場と参詣道	2004									
		奥州藤原氏と極楽浄土	平泉—仏国(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群—	2011									
		神道と寝殿造り	厳島神社	1996									
10月14日	明治日本の産業革命遺産から見る産業の発展	神仏習合と徳川家康	日光の社寺	1999									
		鉄鋼・造船・石炭産業	明治日本の産業革命遺産	2015									
		製糸業、官営模範工場	富岡製糸場と絹産業遺産群	2014									
		養蚕、煙草生産	白川郷・五箇山の合掌造り集落	1995									
11月4日	ヨーロッパ①:産業の発展	イギリス産業革命	アイアンブリッジ峡谷	1986									
		イギリス産業革命	ニュー・ラナーク	2001									
		ルール工業地帯	エッセンのツォルフェライン炭鉱遺産群	2001									
		伝統工芸	ヴェネツィアとその潟	1987									
		ワイン産地	トカイ地方のワイン産地の歴史的文化的景観	2002									
		ワイン産地	サン＝テミリオン地域	1999									
11月11日	ヨーロッパ②:ヨーロッパの統合	干拓地	キンデルダイク-エルスハウトの風車群	1997									
		ギリシア建築	アテネのアクロポリス	1987									
		ローマ建築	デロス島	1990									
		ローマ建築	ローマ歴史地区	1980/1990									
		ロマネスク建築	サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路	1993									
		ロマネスク建築	ピサのドゥオーモ広場	1987/2007									
		ゴシック建築	アヴィニョンの歴史地区	1995									
		ゴシック建築	バリのセヌンダ	1991									
		ビザンツ建築	イスタンブル歴史地区	1985									
		ビザンツ建築	モスクワのクレムリンと赤の広場	1990									
		ルネサンス建築	フィレンツェの歴史地区	1982									
		ルネサンス建築	ヴァティカン市国	1984									
11月18日	南北アメリカ・オセアニア・移民による国づくり	バロック建築	ヴェルサイユ宮殿と庭園	1979/2007									
		バロック建築	シェーンブルン宮殿と庭園	1996									
		宗教改革	アイスレーベンとヴィッテンベルクのルター記念建造物群	1996									
		自由と平等の象徴	自由の女神	1984									
		自由と平等の象徴	マチュ・ピチュ	1983									
		ラテンアメリカの古代文明	チチェン・イツァの古代都市	1988									
		ラテンアメリカの古代文明	ナスカとフマナ平原の地上絵	1994									
		ラテンアメリカの古代文明	ラバ・ニュー国立公園	1995									
11月5日	中央・西アジア・アフリカ:ヨーロッパ支配からの脱却	ラテンアメリカの古代文明	ボトシ市街	1987									
		ラテンアメリカの古代文明	石見銀山遺跡とその文化的景観	2007									
		アボリジニの聖地	ウルル、カタ・ジュタ国立公園	1987/1994									
		現代建築	シドニー・オペラハウス	2007									
		現代建築	ブラジリア	1987									
		人類の誕生	アワッシュ川下流域	1980									
		アフリカの中世都市	伝説の都市トンプクトゥ	1988									
		アフリカの中世都市	大ジンバブエ遺跡	1986									
11月12日	東南アジア・韓国・中国:世界の成長センター	負の遺産	ゴレ島	1978									
		負の遺産	ロベン島	1999									
		地中海世界	フェニキア都市ビブロス	1984									
		アケメネス朝ペルシア	ペルセポリス	1979									
		ティムール朝	文化交差点サマルカンド	2001									
		危機遺産	バーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群	2003/危2003									
11月12日	東南アジア・韓国・中国:世界の成長センター	ベトナム=中国+フランスの影響	フエの歴史的建造物群	1993									
		棚田	コルディエーラ山脈の棚田	1995									
		中華帝国をめぐって	始皇帝陵と兵馬俑坑	1987									
		中華帝国をめぐって	万里の長城	1987									
		中華帝国をめぐって	曲阜の孔廟、孔林、孔府	1994									
		中華帝国をめぐって	北京と瀋陽の故宮	1987/2004									
		チベット	ラサのポタラ宮歴史地区	1994/2001									
		中韓をむすぶ琉球	琉球王国のグスク及び関連遺産群	2000									
11月12日	東南アジア・韓国・中国:世界の成長センター	朝鮮半島の遺跡	宗廟	1995									
		朝鮮半島の遺跡	高敞、和順、江華の支石墓跡	2000									

【3学期の各授業の概要】

＜第20回＞ 検定直前対策&世界遺産検定受験

12月中旬の世界遺産検定受験に向けて、これまで学んできた内容を踏まえて対策問題に取り組む。

＜第21回＞ 世界遺産の光と影

班ごとに担当する日本の世界遺産について、新聞の特集記事(表1)をもとにして、世界遺産を取り巻く現状を把握し、4枚のフリップに起承転結をまとめさせた。

＜第22回＞ 世界遺産地域の問題構造分析

世界遺産登録は地域にとってPositive Impact としてとらえられるものもあれば、Negative Impact になってしまうケースもある。世界遺産登録によって生じる現象を、PI と NI でポストイットの色を分けて、ブレインストーミングで列挙する。その後、出てきたキーワードを用いて、ポスターを作成し、世界遺産地域の問題構造を分析する。また、レポート課題として日本の世界遺産が抱える課題の共通点を挙げさせた。

写真1 生徒が作成した「白神山地」をめぐる状況



写真2 生徒が作成した世界遺産登録地域の問題構造図

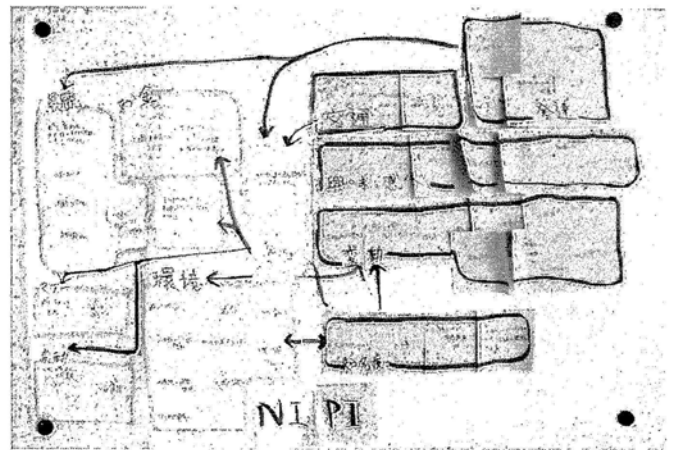


表1 「世界遺産の光と影」で取り扱った新聞記事一覧

遺産分類	シリーズ・記事名	記事日付	主要キャプション
自然遺産	白神山地 白神山地を守る 世界自然遺産20年①	2013/11/14	食害の主 繁殖の兆し シカの脅威
	白神山地 白神山地を守る 世界自然遺産20年②	2013/11/22	難しい駆除 先手必須 植生の維持
	白神山地 白神山地を生かす 世界自然遺産20年①	2013/12/15	マタギの猟場奪う 入山規制
	白神山地 白神山地を生かす 世界自然遺産20年②	2013/12/16	経済配慮 条例「ノー」 入山規制
	屋久島 変わる自然遺産 屋久島から①	2009/5/18	原生林壊す 過剰な来訪者
	屋久島 変わる自然遺産 屋久島から②	2009/5/19	食べ尽くされて裸の森
	屋久島 変わる自然遺産 屋久島から③	2009/5/20	産卵率低下 光が悪影響
	屋久島 変わる自然遺産 屋久島から④	2009/5/22	島の生態系 守る強める
	知床 知床を活かす① 世界遺産10年	2015/6/9	「守る」「呼ぶ」両立探る 接点はガイド増す役割
	知床 知床を活かす② 世界遺産10年	2015/6/11	遭難続き 登山道どうする 「自然のまま」か整備か
	知床 知床を活かす③ 世界遺産10年	2015/6/12	ヒグマと人との距離模索 共存へ生態や血縁調査も
	知床 知床を活かす④ 世界遺産10年	2015/6/13	観光客「冬枯れ」どう解消 南北の違い、戦略に投影
	小笠原諸島 世界自然遺産 小笠原を守る①	2011/7/4	豊かな固有種残すため
	小笠原諸島 世界自然遺産 小笠原を守る②	2011/7/6	森はフェンスの向こう
	小笠原諸島 世界自然遺産 小笠原を守る③	2011/7/7	上陸ルール 在り方模索
	小笠原諸島 世界自然遺産 小笠原を守る④	2011/7/8	空港構想 島民はんろう
文化遺産	石見銀山、はや世界遺産効果	2007/7/22	観光客2.5倍、満車 人口450人、入出40万人
	世界遺産・石見銀山 観光ラッシュ 弱る環境	2008/5/18	排ガス・振動、悩む住民 コウモリ2300匹→250匹
	世界遺産 観光ジレンマ	2008/6/15	鳥獣・石見銀山 希少コウモリ10分の1
	世界遺産 楽じゃない	2011/6/21	騒音ゴミ「観光公害」/費用が重荷 断念も 郷土の魅力考える契機
	富士山 途上の世界遺産 富士山 登録から1年①	2014/6/17	景観守る意識育つか 看板い基準、改修に費用の壁 行政「強力な規制は困難」
	富士山 途上の世界遺産 富士山 登録から1年②	2014/6/18	観光の圧力「平穏」危機 湖面と山小屋、改善へ一歩
	富士山 途上の世界遺産 富士山 登録から1年③	2014/6/19	軽装・弾丸…無謀登山 閉山期間中の事故も絶えず
	富士山 途上の世界遺産 富士山 登録から1年④	2014/6/20	信仰の歴史に再び光 「御師の家」や山腹の古道
	富岡製糸場 世界遺産の先に「登録」後を考える①	2014/6/23	製糸場関係者の決意 快挙「ゴールではない」 修理前倒しへ募金活動
	富岡製糸場 世界遺産の先に「登録」後を考える②	2014/6/24	保存と活用のバランス 遺構で公開拡大できず 復元・修復に難、見学者増に壁
富岡製糸場 世界遺産の先に「登録」後を考える③	2014/6/25	外国人観光客への対応 多言語ガイド、スマホでも 解説員一人、外部協力で充実を	
富岡製糸場 世界遺産の先に「登録」後を考える④	2014/6/26	地域活性化への生かし方 特需のカギ握る団体客 周辺回遊・滞在させる戦略急務	

(記事は朝日新聞 開成II ビジュアルを用いて取得したものである)

<第23回> 世界遺産地域の問題構造プレゼン

前時に作成したポスターを用いて、各世界遺産地域の問題構造をプレゼンしあう。各班の半分が話し手に、半分が聞き手になって、全グループのプレゼンを聞いて回るワールドカフェ方式の改造版という手法をとった。最後に世界遺産地域の持続可能性を考えていくうえで優先すべき事項を9つ(図1:A地域活性化、B環境保全、C規制・制限、D観光収入UP、Eインフラ整備、F文化の維持、G地元住民生活、H理念の啓発、I制度の見直し)提示し、ダイヤモンドランキング(表2)を作成させるレポートを課した。

写真3 生徒が作成した「白神山地」の紹介ポスター



図1 ダイヤモンドランキングの9つの指標

<p>A 地域活性化</p> <p>観光地化が図られることで雇用が生まれ、地域活性化や町おこしにつながる</p>	<p>B 環境保全</p> <p>生態系、絶滅危惧種や希少動物の保護、外来種の侵入防止などの環境保全を図る</p>	<p>C 規制・制限</p> <p>条例などで遺産地域への入場規制・入場料徴収による過剰な立入を制限する</p>
<p>D 観光収入UP</p> <p>登録によって知名度が向上し、観光客の増加、観光収入の増加を図る</p>	<p>E インフラ整備</p> <p>遺産地域へのアクセスや利便性向上のため、交通手段などのインフラ拡充整備</p>	<p>F 文化の維持</p> <p>遺産価値として長い年月をかけて育まれた文化の維持や景観の保護を図る</p>
<p>G 地元住民生活</p> <p>遺産地域の地元住民が観光客のマナーや騒音等に影響されず安心して生活できる</p>	<p>H 理念の啓発</p> <p>メディアや教育などで世界遺産の理念を啓発し、住民や観光客の意識改善を図る</p>	<p>I 制度の見直し</p> <p>世界遺産登録の条件や増え続ける登録数など、世界遺産制度そのものを見直す</p>

<第24回> 世界遺産地域の持続可能性を考える

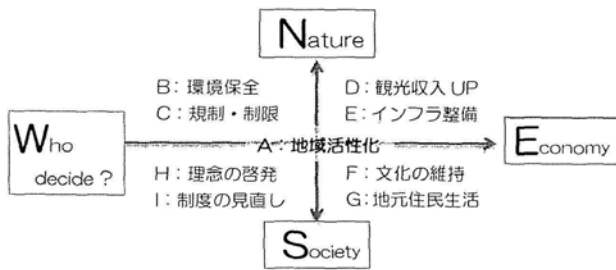
最後の授業は前時のダイヤモンドランキングをもとにして、世界遺産とその地域の持続可能性を考えるうえで最も重要なことは何かというテーマについてクラス全体でディスカッションを行った。ダイヤモンドランキングの9つの指標は、図2に掲げたとおり、Nature(自然・環境)、Society(社会・文化)の対立構造・ジレンマに、Economy(経済)の論理が介入してくるなかで、どのようなWho decide?(意思決定)していくかといった開発コンパスで用いられる4つの象限にあてはめて抽出したものである。ディスカッションでは、それぞれの立場が最優先だ・最も大切だという議論から、やがてそれぞれを成立・両立させるために、ベースとなる指標や他の指標を包含する指標を探るような議論にシフトしていった。議論の最中に、相手の主張に納得し、立場を替える者も数名出てきた。

表2 ダイヤモンドランキング概況

	得点平均	最優先人数	後回し人数	(事後)最優先
A	2.79	1	0	1
B	4.10	8	0	7
C	3.24	2	1	5
D	2.03	0	11	0
E	2.24	0	6	0
F	3.59	4	1	4
G	3.38	6	1	2
H	3.21	5	1	7
I	2.41	3	8	3

※最優先5点~後回し1点として計算

図2 ダイヤモンドランキングの9つの指標



<3 学期最終レポート>

授業でのディスカッションをふまえて、世界遺産を持続可能なものにするためには遺産地域の生活（経済発展・開発）と世界遺産としての価値の維持（景観・環境保全）のどちらを重視すべきか。またはそれらの両立をどのように図るべきだと考えるかを問うた。以下に列挙する解答を得た。

Point 1. 遺産地域の生活（経済発展・開発）

vs 世界遺産としての価値の維持（景観・環境保全）

- ・ 地域の人々の生活や経済発展がなければそもそも世界遺産は持続可能なものにはならない。
- ・ 経済発展は世界遺産の価値が守られてこそそのものだ。
- ・ 「大切に守ろう」という意識により、世界遺産が廃れない観光資源となり、地域の経済発展につながる。
- ・ 世界遺産の本質的な目的は文化継承や自然の保護である。ありのままの姿を維持すること。
- ・ 環境は一度悪くなると元に戻すのが難しい。景観や環境を守ることは地域住民の生活を守ることに繋がる。
- ・ 遺産としての価値が無くなってしまったら、登録解除など持続可能どころではない。
- ・ 経済発展を優先してしまうと、いずれ収入源である遺産も成り立たなくなってしまう。
- ・ 「人類の宝」を守るためにそのベースとなる環境を保全しなければならない。
- ・ 遺産地域と生活地域を分けるべきだ。
- ・ 教育が必要である。観光客に「世界遺産≠観光スポット」であることを再認識してもらう。
- ・ 遺産価値の方が地域住民よりも長い歴史を有するもので、後世に受け継いでいくべきだ。ただし地域住民にとっても旨みが必要だ。違う形の保護のかたちも認めていく必要がある。
- ・ 世界遺産登録以前の状況を考えると、地域住民の生活と遺産価値の維持は同格に並ぶ。対立構造ではない。

Point 2. 対立を超えて、開発と環境の両立を図るには

- ・ 地域住民が世界遺産登録前と変わらない生活を送れることが大前提。
- ・ 景観や環境が守られ続けていくことは、地域住民にとってもうれしいことであるはず。地域住民への恩返し。
- ・ 遺産価値の維持と地域住民の生活の両立を実現するには、まず保護すべき最低限の範囲やきまりを設ける。
- ・ 入場制限・規制。入場を禁止してVRで疑似体験。
- ・ 遺産価値の維持と地域住民の生活のどちらかを成立させるためにどちらかが成り立たないというジレンマは本来存在せず、必然的に両立は図らなければならない。遺産ありきではない地域を目指すことが最善策。
- ・ 世界遺産のシステムやルールを見直すこと。一人一人が「人類の宝物」という意識を持つことが必要である。
- ・ 国ではなく地域が誇りを持って発信できる環境づくりが必要。

4. おわりに

本科目の開発においては、淡野（2010）をはじめとする先行研究で指摘されていた課題を受けて、地理の授業に年間を通して世界遺産を組み込んだ形で取り組んだ。やや強引に取り上げた箇所も散見されるが、各単元に配当して年間を通して取り扱うことに概ね支障はない。自然遺産を取り上げた授業では、自然地理学習が遺産価値の理解に大きく貢献してくれた。また、宗教や産業に関わる遺産を取り上げた授業では、同じ2年次で学ぶ必修科目の世界史Aでの既習事項をふまえながら、地歴融合単元として空間認識と時間認識の両輪で取り扱うことができた。最後に世界地誌のなかで、多くの文化遺産を取り上げる形をとったが、やはり歴史的な事項の登場が優勢であり、世界地誌単元として、また地歴融合単元としては課題が残る形となった。

1年間の学びの成果として世界遺産検定3級に合格するという目標を設定したために、生徒にとってはややもすると検定対策授業のようにとられがちであったが、授業を重ねるうちに、世界遺産について魅了されるだけでなく、地理の面白さや奥深さに気付いてくれる生徒も一定数いたことが最後の感想コメントから伺うことができた。世界遺産についての教育（Education about the World Heritage）による世界遺産の光の部分だけを学ぶのではなく、世界遺産地域において世界遺産登録によって生じた諸問題などの陰や負の側面にもしっかりと目を向けるなど、世界遺産を通しての教育（Education through the World Heritage）の側面も持たせることで、地理教育として内容

の充実が図れるだけでなく、世界遺産を切り口としたESDとしても機能するようになった。

次期学習指導要領下の地理歴史科では、地歴融合科目の実現こそ無かったが、地理・歴史双方においてそれぞれの科目の独自性を発揮しつつも、地理においては歴史的背景をふまえての考察、歴史においては地理的条件との関連付けを図るなど各科目において地歴融合の研究と実践は不可欠である。地理歴史科の教科書や資料集等には世界遺産に関する情報が散りばめられている。世界遺産を切り口とした地歴融合型の授業、また、世界遺産を切り口としたESD授業の開発と実践のより一層の深化が望まれる。そして、ESDや世界遺産教育において、地理教育が持つコンテンツとスキルの有用性と重要性をもっと発信していく必要がある。本実践がその嚆矢となることができれば、筆者にとって望外の喜びである。

【参考・引用文献】

- ・岩田貢 (2016). 地理学習における世界遺産の扱い. 龍谷教職ジャーナル第4号. pp.65-81.
- ・小松伸之 (2016). 社会科教育法における世界遺産の教材化と模擬授業の実践. 東京成徳大学研究紀要 23. pp.193-203.
- ・神野浩・淡野明彦 (2009). 中学校における世界遺産の指導の実践と生徒の認知. 教育実践総合センター研究紀要 18. pp.17-22.
- ・神野浩・淡野明彦 (2010). 高等学校地理学習における世界遺産の指導の実践. 教育実践総合センター研究紀要 19. pp.11-17.
- ・谷口尚之・田淵五十生 (2010). 世界遺産教育における授業モデルづくり—世界自然遺産・知床を事例として—. 奈良教育大学紀要人文・社会科学 59(1). pp.85-99.
- ・田淵五十生・中澤静男 (2007). ESDを視野に入れた世界遺産教育—ユネスコの提起する教育をどう受けとめるか. 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要第16巻. pp.59-66.
- ・田淵五十生・谷口尚之・祐岡武志 (2008). 世界遺産教育の教材化の視点と実践報告—「古都奈良の文化財」と「法隆寺地域の仏像建造物」を中心にして—. 教育実践総合センター研究紀要 17. pp.289-297.
- ・田淵五十生 (2011) 『世界遺産教育は可能か—ESD(持続可能な開発のための教育)をめざして—』東山書房. pp.19-26.
- ・淡野明彦 (2006). 小学校社会科学習における世界遺産の教材化. 奈良教育大学紀要人文・社会科学 55. pp.101-112.
- ・淡野明彦 (2007). 中学校社会科(地理的分野)学習における世界遺産の教材化. 奈良教育大学紀要人文・社会科学 56. pp.103-114.
- ・淡野明彦 (2009). 高等学校地理歴史(地理A、地理B)学習における世界遺産の教材化. 奈良教育大学紀要人文・社会科学 58. pp.101-106.
- ・中澤静男・田淵五十生 (2008). 地域学習としての「世界遺産教育」. 奈良教育大学紀要人文・社会科学 57(1). pp.129-140.
- ・山下欣浩・田淵五十生 (2010). 日本ユネスコ協会連盟の教材キット「守ろう地球のたからもの」—その作成意図と具体的事例—. 教育実践総合センター研究紀要 19. pp.135-144.
- ・祐岡武志・田淵五十生 (2007). 世界遺産教育実践の事始め—ユネスコ『教師用世界遺産教育教材』を素材として—. 教育実践総合センター研究紀要第16号. pp.207-215.
- ・祐岡武志・中澤静男 (2012). 世界遺産教育における教材化と教育実践のあり方—「法隆寺地域の仏教建造物」と「木の文化」の視点から—. 奈良教育大学紀要. 人文・社会科学 61(1). pp.239-250.